# かささぎ 通信 第75号

2018年 12月 14日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」


**二〇一八年十一月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集かささぎ物語』（1995年、刈谷市教育委員会）所収の「虎」（『赤い鳥』昭和7年2月号初出）「ちえの小法師」（『赤い鳥』昭和7年7月号初出）「おばあさんと鬼」（『赤い鳥』昭和6年7月号初出）を読みました。**

「虎」（森三郎）は中国の話です。日本の「狼報恩譚」などが中国や韓国では「虎の報恩」として広く分布していますが、この話の虎はいわば無償の行為で、虎の穴に落ち込んだ若者の陳を助けてくれます。子虎を育てていた母虎は陳に危害を加えなかったばかりか、自分の子と同じように陳にも食料を与え、その上、陳を町まで送り返してくれるのです。陳は何とかお礼をしようと思いますが、町に現れた虎を退治しようとする人たちに虎は捕まってしまいます。しかし、陳と虎との信頼関係が分かって、虎は無事山へ返されます。結末の、陳と虎との別れの場面は心に染み入る叙述で、三郎の筆の力を感じました。

「ちえの小法師」（中村吉麿）は、「森三郎の作品を読む会通信」第16号でも触れましたが、三河の小垣江を舞台にした、いたずら狸とお寺の小僧さんとの知恵比べの話です。狸は、綿を買い集めに行った村の呆助を、娘に化けてだまし、荷物の綿を燃やしてしまいます。そこで小僧さんが狸を懲らしめるという話です。『刈谷市史』によると、江戸時代後期一八二三年に、小垣江村で、木綿の仲買人から運搬を頼まれた万助が、買継問屋まで木綿を運んだ帰り、その代金十両を、昼日中に三人組の強盗に取られてしまうという事件が起こりました。小垣江村でこの当時綿の生産が盛んだったという事情も分かりますし、森三郎は百年近く前の世間話を昔話として親から聞いていて、「ちえの小法師」のヒントにしたのかと想像すると、愉快になります。

「おばあさんと鬼」（茅原順三）は、ラフカディオ・ハーンの The Old Woman Who Lost Her Dumpling (Japanese Fairy Tale)（1902年）を再話したものだろうということはすでに本会の「通信」の中でも触れてきました（5号、60号）。森三郎の作品中、ハーンの作品との関連が分かっているもの、または想像されるものは、「おばあさんと鬼」以外にも「赤穴宗右衛門兄弟」「鐘」「かささぎ物語」があることが分かっています（「通信」63号、64号、72号、73号）。『赤い鳥事典』（2018年）のハーンの項の執筆者・風早悟史氏によると、森三郎の「おばあさんと鬼」には原作にはない独自の脚色が施されているそうです。「読む会」でもいずれハーンの原作と三郎の「おばあさんと鬼」の読み比べをしたいねと、課題を残して会を閉じました。

去る十一月十八日（日）刈谷図書館協会主催の鈴木潤吉氏による講演会『赤い鳥』と祖父、鈴木三重吉」が開催されました。鈴木三重吉の生涯をたどりながらその業績が、スライドを活用して紹介されました。写真や童謡の曲も交えて、『赤い鳥』の歴史が語られ、「分かりやすく楽しかった」と好評でした。「ぽっぽのお手帳」の話（森三郎も「創刊号に出た、精密な意味での先生の唯一の創作である『ぽっぽのお手帳』」（「私の記者時代」等）と書いています）、「赤い鳥音楽会」の話（今年の六月の「第六回森三郎に親しむ集い」でもこの音楽会をイメージしてミニコンサートを採り入れました）、「赤い鳥」の読者の話（偶然にも、「かささぎ通信」74号で触れた『岩樟舟夜話』の「中村忠一」の名前が載っている会員名簿の頁がスライドで写し出されました）など、「森三郎刈谷市民の会」のこれまでの活動と浅からぬ縁を感じる話が次々と登場しました。講演会の後、三重吉が愛飲していたカルピスの看板が出てくる森三郎の童話「角兵衛獅子」の話を潤吉氏にしたところ、氏もスライドの最後にカルピスの話を用意していたことが分かり、ますます不思議なつながりを感じる、興味深い講演会でした。

**次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日に刈谷市中央図書館で開催）**

**二〇一九年一月十一日（金）午後一時半～三時半**

**「いたちの手ぬぐい」「アオイの大臣」（『森三郎童話選集かささぎ物語』）**